説教20220828ヘブライ13：1-8ルカ14：1，7-14「へりくだる者の宴会」

　「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」この御言葉は、とても実践的な御言葉で、これを聞いてこの通り実践しておられるクリスチャンが多いなあ、というのが私の受けた印象です。というのは、私が神学生のころ、夏期伝道実習に伺って、信者さんたちの家に招かれ食事をしたり、又、泊めて頂いたりした体験を、思い起こしてみますと、彼ら彼女らは、心してこの御言葉を実践されていたのだなあと、思わされるからです。

しかし、２年余り前に始まったコロナ渦によって、このおもてなしの実践に対して強力な逆風が吹いてしまいました。コロナウィルスを人に移してしまうのではないかという恐れの前に、私たちが聖書で勧められていますこのおもてなしの実践は、見事に委縮させられてしまったと言わざるを得ません。

まあ、伝道師がこんな弱気なことを言って水を差していてもしょうがありませんが、それでも、今、吹き荒れているこの逆風の中で、おもてなしについて冷静に考えてみることも無駄ではないように思います。

おもてなしの意味合いは、時代によって変遷するように思いますが、この、おもてなしの語源を調べますと、とりなし、つくろい、たしなみ、と言ったことで、平安、室町時代に発祥した茶の湯から始まったと言われ、客や大切な人への気遣いや心配りをする心が築かれた、世界に誇れる日本の文化と言える、と書いてありました。 (（株）おもてなし道hp)

おもてなしの根幹にあることは、客や大切な人への気遣いや心配りである、と書かれています。これを聞いて皆さん、おもてなし、最高！と思われるでしょうか。いかがでしょうか。

確かに客や大切な人への気遣いや心配り、ということは日常生活で欠かしてはならない倫理の一つでありましょう。

しかし、聖書が説くところのもてなしは、多少皮肉っぽく、はっきりと表現すれば、お客さんではない人や大切でない人への気遣いや心配りなのです。これは客や大切な人への気遣いや心配りをしないという意味ではありません。むしろ、客であろうがなかろうが、大切な人であろうがなかろうがとにかく気遣いや心配りをしなさいという意味です。なぜそう言えるかと言いますと、このヘブライ書１３章２節のもてなしという語の元のギリシャ語はフィロクセニアと言いまして、その意味は、見知らぬ人に対する親切ということだからです。英語でいえば、ホスピタリティです。ホスピタル、病院やホスピスの語源であります。病院というのは、基本、自分にとっての御客や大切な人であるということに関わりなく、全ての見知らぬ人、あるいは旅人を受け入れて、そうして大切に看病するわけですから、そこら辺から、このフィロクセニア（おもてなし）の意味合いを思い起こしていければと願います。

ここからは、おもてなしをフィロクセニアの意味で語って参りたいと思いますが、もてなすということは、見知らぬ人に対することですので、その作法や段取りも、実は茶の湯のように形定められることではありませんでした。聖書にはさまざまなもてなしの様相が描かれています。

申命記15：7より

どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。

貧しい同胞に対して、手を大きく開いて必要とするものを十分に貸し与える、というのもおもてなしの一つの形であります。又、招きの言葉で述べられました、ソロモンが宮殿で豪華な食事と多くの捧げものでシェバの女王を歓待したのも又、おもてなしの一つの形であります。

又、主なる神の私たち人間へのおもてなしということでいえば、

イザヤ書２５章６節からになります。

万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。主はこの山で／すべての民の顔を包んでいた布と／すべての国を覆っていた布を滅ぼし死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。

これら３つのおもてなし、貧しい同胞に手を大きく開く事、豪華な食事と捧げものを供する事、主なる神が人間に永遠の命を与えられる祝宴、この３つに共通することは、見知らぬものに接する不思議な驚きやワクワク感、充足なのではないでしょうか。

ヘブライ書１３章２節

旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。

見知らぬ旅人をもてなしているつもりが、なんとそれは天使だったといった、不思議な驚き、ワクワク感がここに語られています。

以上の事を踏まえて、今日のルカ福音書の箇所を読みますと内容がよりよくわかってきます。

１４章１節

安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。

このように、イエス様はたまにファリサイ派の人の家に招かれ食事をともにしたことが新約聖書には記されています。今の私たちからすれば、イエス様とファリサイ派は対立関係にあったのだから、なぜ、対立した人の家に招かれ食事を共にするのか、と腑に落ちないこともあるかも知れません。しかし、先述しましたおもてなしの意味を勘案しますとそのことも腑に落ちてきます。イエス様とファリサイ派の人たちとは、同じ時代に同じ場所を歩んでいましたから、当然、旧約聖書に記されているおもてなしに対する理解を共有していました。ファリサイ派の人々は貧しい同胞であるイエス様に対して「手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与え」たのであり、イエス様も聖書に従って、それを受け入れたのであります。そういうわけで、イエス様とファリサイ派の人たちとは同じ社会の中を歩んでいたと言えるでしょうが、だんだんと両者の間の亀裂が深まり敵意が激しくなって、遂にはファリサイ派の人たちが中心となって、イエス様が十字架に付けられた成り行きが新約聖書には記されています。

今日のファリサイ派の議員の家での宴会の席に招かれたイエス様は、その席で行われている宴会の現実の姿を見ながら、ファリサイ派の人たちに宴会についての教訓を語られます。結論から申しますと、イエス様は、ただ旧約聖書に記されていることを忠実に宣べ伝えただけであり、そして、実は、その旧約聖書に書かれてあることを実行していなかったファリサイ派の人たちが自分たちの偽善のよろいをはがされると思って、イエス様に対して敵意を募らせるという場面であります。

では、イエス様の御言葉を聞いて参りましょう。

招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。

このように言われたイエス様は、旧約聖書に記された内容をただ忠実に語られたのです。その根拠となるのが次の箇所です。

箴言25章 7節

高貴な人の前でに落とされるよりも／に着くようにと言われる方がよい。

あるいは、イザヤ書５７章15節

高く、あがめられて、永遠にいまし／その名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く、聖なる所に住み／打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり／へりくだる霊の人に命を得させ／打ち砕かれた心の人に命を得させる。

どちらも、へりくだることを勧める御言葉ですが、イエス様も、この宴会の最中に、このへりくだりの勧告をここぞとばかり述べられたのでした。

更にイエス様は、

宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」と言われました。

これは、申命記15：7の、「どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。」という内容を踏まえた御言葉であります。

この様にイエス様は、ファリサイ派の人に対してひたすら、旧約聖書に記されたおもてなしの内容を忠実に宣べ伝えるのですけれども、ファリサイ派の人が実践しているおもてなしはそれとはズレていたのでした。

７節、イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、

と記されていますから、イエスは、上席を選ぼうとするお客の様子を目の当たりにして、この宴会が旧約聖書に記されているおもてなしの内容からずれていることを認識されたのでした。

又、１２節、、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。、と記されていますから、イエス様は招かれているメンバーをみて、ここに招いた人が本来旧約聖書に記されていますおもてなしの見知らぬものに接する不思議な驚きやワクワク感、ではなくて、利害ですとか、義理ですとか、友人関係のしがらみの方に支配されていることを見て取ったのでした。

まあ、この様に、招いたお客であるイエス様から、歯に衣を帰せず、自分たちの宴会の実態について痛いところを突かれて、言い表されたファリサイ派の人達が、イエス様に対して敵意を増し加えていくのも当然と言えるでしょうが、イエス様は全てをお見通しですから、この様な宴会でのやり取りも全てを承知のうえでなさったことでありましょう。

ファリサイ派の人達は、知ってか知らずか、いつしか宴会における上座とか下座を気にするようになり、友人や、兄弟や、親類や、近所の金持ちばかりを宴会に招くようになったようです。だんだんと旧約聖書に記されているおもてなしの本質からはズレて来たようであります。しかし彼らが、この宴会で、旅人であるイエス様を招いたことは幸いなことでありました。彼らはこの宴席で、イエス様の不思議な驚きとワクワク感に満ちた御言葉に接することが出来たのですから。でも彼らはイエス様の御言葉を受け入れられず、むしろイエス様に敵意を懐いてしまうのです。

これを聞いた私たちは、ああ何と愚かなファリサイ派の人達と思うかも知れませんが、私たちが今日のファリサイ派の人達に学ぶべきことが１点あります。それは、ファリサイ派の人が自宅にイエス様を招き入れたということです。

イエス様のようないわば見知らぬ人を招き入れることには、恐れが伴います。初めは、イエス様が何をもたらしてくれるのか、分からないからです。旅人の誰もが良いことをもたらすとは限りません。時には、物をかすめ取るために、招き入れられようとする旅人もいないとは限らないからです。

しかし、聖書は私たちに、旅人をもてなすことを忘れてはいけません、とすすめています。

そのことを冒頭の言葉で再度表現すれば、お客さんではない人や大切でない人への思いやりであります。

　聖書に記されたおもてなしは、見知らぬものやこととの出会いを私たちにもたらすでしょう。このファリサイ派の人の宴会では、ファリサイ派の人はイエス様に出会うことが出来ませんでしたが、それでも、私たちは旅人をもてなすことを忘れてはいけません。

　旅人をもてなすためには、イエス様を信じることが必要です。なぜなら「主はわたしの助け手。わたしは恐れない。人はわたしに何ができるだろう。」と言われる通りだからです。

どうか、私たちは永遠に変わることのない主イエスを信じて、旅人を招き続ける生活を続けて参りたいと願います。

祈ります

主よ、この地上にあって天のふるさとを目指して旅する私たちを祝し、守って下さい。私たちはこの世にあって多くの苦しみ悲しみの谷間を通り抜けていかねばなりませんが、あなたの御手に委ねて、常に心穏やかです。救い主であるあなたに感謝と賛美を捧げます。

移ろいゆくこの世にあって、昨日も今日も変わることがないのは御子キリストの御言葉だけです。どうか、私たちが常に御言葉に聞き従い、最後の神の国の宴会へ入ることが出来ますように、日々、私たちを守って下さい。

　多くの偽りの喜びが、私たちを誘惑してきますが、どうか私たちが偽りの言葉と、まことの言葉とを峻別することが出来るようにしてください。この世にあってそれぞれが旅人である私たちが、孤独に陥ることがないように、私たちに、もてなしの心をお与えください。